

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

### B. 円滑な学位授与の促進

#### ①複数教員による多面的な指導体制の整備

## 取組を進めるに当たり困難であった事例について

### B. 円滑な学位授与の促進

#### ①複数教員による多面的な指導体制の整備

##### 《人社系》

#### ●筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻

##### 「新領域開拓のための人社系異分野融合型教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

「異分野融合リサーチワークショップ」は学生と所属する専攻の主旨導教員、および専攻外(学外も含む)の外部アドバイザー教員の3者から成る共同指導体制によって運営された。年に2回の報告会において主旨導教員から複数指導の内容を報告してもらった。しかし分野によっては文学と社会科学のように研究の方法論が全く異なり、学生をとまどわせることも少なくなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

専攻の異なる教員の複数指導は、相互の意思疎通が難しく、学生がその間にたって混乱をきたす。予想以上に専攻間の「壁」が厚いものであった。「異分野融合リサーチワークショップ」は大学院生の自主性を尊重し、専攻間の「壁」を自らが乗り越えられるように、コーディネーターを導入し、学生をサポートした。学生の自主的研究(問題提起と解決に向けての工夫)が進むほど、専攻横断・複数指導体制は改善された。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

専攻横断複数指導体制を確立するために、コーディネーターによる学生のサポート、年に2回の報告会、学生による評価アンケートを行った。その結果、学生と教員間の意思疎通が改善された。

##### 《理工農系》

#### ●茨城大学農学研究科

##### 「地域サステナビリティの実践農学教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムは、分野横断的な取組であり、分野が異なる複数教員による多面的な指導体制の整備が求められた。プログラム開始時では、そのような指導体制に参加して対応できる教員の数が十分でないことがあげられた。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

### B. 円滑な学位授与の促進

#### ①複数教員による多面的な指導体制の整備

要因の根源は、研究分野の細分化という現代の科学の問題があると思われる。分野を超えて指導体制に加わる教員の確保をどうするか、加わった場合の教育負担をどう軽減するかなどの課題が残った。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

参加教員の拡充は段階的に行った。本プログラムを通じて学生の成長する姿が見えたとき、それが教員にとっては一番の喜びであった。それを広めていくことが大事だと思っている。

## ●会津大学コンピュータ理工学研究科

### 「創造工房とアリーナに基づく革新的 IT 教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

平成 19 年 9 月に新専攻である「情報技術・プロジェクトマネジメント専攻」を設立したが、現在まで当専攻に在籍した（している）学生は 13 名にとどまっている。入学時オリエンテーションでの説明、広報媒体による宣伝、教員への働きかけを行ったが、なかなかプログラムが浸透せず、結果的に新専攻への入学者が増えなかった。

(苦労したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

新専攻におけるプログラムの実施・運用が段階的に整備されていったこともあり、プログラムへ積極的に参加する学生や担当教員が少なかったことが要因と思われる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

プログラムについての周知や大学院進学者増加に向けて、大学院進学相談窓口を設置し、メールマガジンの配信、大学院進学についてのアンケート等を行ったが、根本的な学生の進学意識向上へは必ずしもつながらなかった。PBL 型のプログラムに対して学生が積極的に参加できるよう、きめ細やかな指導体制を整えるためには、より一層の教員間の連携・協力体制が必要と思われる。

## ●同志社大学工学研究科電気電子工学専攻

### 「電力・通信インフラ研究者・技術者育成課程」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

インフラストラクチャーと言う広汎な分野に対応するため、同一専攻内ではあるが、電

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

### B. 円滑な学位授与の促進

#### ①複数教員による多面的な指導体制の整備

力工学、電気機器工学、通信工学、電波工学、光エレクトロニクス工学等合計7名の教員を配置し、複数指導体制を整えた。しかし、登録、履修学生の偏在もあり、同一専攻異分野の教員、学生に対するプログラムの趣旨の理解を得ることができず、複数指導体制を十分に機能させることができなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

従来の工学系専門分野は共通の基礎科目(電気・電子系では電気回路学、電磁気学)を履修した後は細分化され、縦方向の学問体系となっている。一方、本プログラムの研究者・技術者育成課程では、インフラに関わる広汎な学問分野を横断的に履修する必要があった。複数の細分化・専門化された高度な研究・技術分野の講義を基礎科目のみをベースとして履修するのは容易でなかった。結果として全登録学生が本プログラムで定めた必要科目全てを履修することはできなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

- ・本プログラム2年度目からはコア科目のみの履修を必修とし、海外インターンシップ派遣の必要条件とした。併せてインターンシップ希望学生の所属研究室指導教授にその旨連絡し最低限の必要科目の履修指導を依頼した。これにより、少なくとも海外インターンシップ実施学生は本プログラムの定める必要科目を履修するようできた。
- ・インフラに関わる履修科目が分野横断的であることを配慮し、学部段階で必要となる科目を履修させておくのが適切である。このため、電気工学科にインフラコースを立ち上げ、大学院のインフラコースに連動するようにした。

## 〈医療系〉

### ●東北大学医学系研究科医科学専攻

#### 「多層的かつ双方向性の大学院医学教育実質化」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

複数教員指導制として、アドバイザー教員を学生が所属する系とは異なる系から選任した(系とは、研究内容により大きく5つに分かれている)。選任のプロセスには大きな問題は無いが、十分機能的に果たしたとは言い難い。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

重要なのは、アドバイザー教員の教育へのコミットである。主たる研究指導を行う教員とアドバイザー教員・学生がいずれもお互いに研究の進捗に対して積極的に議論するチャンスを能動的に持たないとこの制度は機能しない。制度が開始されたばかりなので、定着

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

B. 円滑な学位授与の促進

①複数教員による多面的な指導体制の整備

と効果的な運用には時間がかかると思われる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

定着と効果的な運用のために、制度の周知を徹底すること、また研究遂行上この制度が有用であることを教員だけでなく学生にも周知することが必要であると考える。

●京都大学医学研究科医学専攻

「共通・分野別教育統合による医学研究者育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

大学院教育コース「発生・細胞生物学」で複数教員による指導の希望者を募ったが、学生側の希望が少なかった。

(苦労したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

複数教員による指導体制にどのような有効性があるのか、学生に十分認知されていなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

多面的で公正な評価が期待されることなど、複数教員指導体制の有効性を予め学生に周知し、理解を広める必要があった。